

介護福祉士養成大学連絡協議会 調査研究委員会概要報告

質的研究「介護福祉士養成大学卒の介護福祉養成大学教員 へのキャリア形成支援の現状と課題」

－当事者への半構造化インタビュー調査の分析から－

介護福祉士養成大学連絡協議会 調査研究委員会 作業部会B

○森山 千賀子(白梅学園大学)

宮内寿彦 (十文字学園女子大学)	竹田千春 (北翔大学)
山口由美 (十文字学園女子大学)	永嶋昌樹 (日本社会事業大学)
松永繁 (岩手県立大学)	久保田寛 (奈良佐保短期大学)



【研究の背景・目的】

- 介護福祉士の養成は二年制課程が中心⇒四年制大学での養成は全体の一割
- 介護福祉士養成⇒介護福祉士に求められる役割の変化に伴い
 - 時間数：時間数1500時間 ⇒1650時間 ⇒1800時間 ⇒1850時間へ
 - 介護福祉士の定義：「入浴、排泄、食事その他の介護」から
(2007年改正)「心身の状況に応じた介護」 (2011年改正)「喀痰吸引等」追加
 - カリキュラム：領域「人間と社会」「介護」「こころとからだのしくみ」+「医療的ケア」
「介護過程」(150時間)、「認知症の理解」(60時間)
- 「求められる介護福祉士像」の見直し(2018年)
 - 高い倫理性を土台としたリーダー、管理者としての力量を備えた人材
 - 介護ニーズの多様化・複雑化・高度化に対応できる介護福祉士
「チームマネジメント」、「地域共生社会」、「発達と老化の理解」(子ども期から高齢期)
 - 一方で、介護福祉士養成施設全体の入学定員割れ、外国人材の参入
 - 介護教員講習会のあり方の是非(開始から20余年経過)

資質の高い介護福祉士の育成と確保が急務  乖離的な状況

- 介護福祉士養成大学を卒業した介護福祉士が、実務経験と研究能力を兼ね備え、介護教員の道へと進み後進育成に奔走している姿に目を向けることが、より高度な介護福祉士教育を継続していくための社会的な 이슈になるのではないか？



本研究の目的は、介護福祉士養成大学を卒業し、現在介護福祉士養成大学で介護教員として従事している大学教員を対象に、半構造化インタビュー調査を通して大学教員として従事するようになるためのキャリア形成支援の現状と課題を明らかにすることである。

※本研究は、介護福祉士養成大学連絡協議会による介護福祉士養成大学の介護教員を対象とした調査研究である。

【研究方法】

1. 調査対象者

介護福祉士養成大学を卒業し、現在介護福祉士養成大学で常勤の介護教員として従事している大学教員

2. 調査の方法

オンライン（WEB）面接による、大まかな質問紙を用いた半構造化インタビュー調査

3. 調査対象者の選定方法

- ・2023年度段階で介護福祉士養成大学の指定を受けている56大学の代表者と、介護福祉士養成大学連絡協議会の個人会員23名に調査協力依頼文書を送付。
- ・選定方法は、入学年度を①1999年度以前、②2000年度から2008年度、③2009年度以降の3つに区分し、条件の合う調査対象者を募集法と機縁法で募った。
- ・紹介・応募にあたり、登録フォームをQRコードで読み取る、又はURLへアクセスし要件を記入してもらい、後日研究実施者が該当者に連絡をとる方法を用いた。

- ・応募期間は、2023年10月2日～2023年10月31日。
- ・調査期間は、2023年11月11日～2023年12月27日。

4. 主な質問項目

主な質問項目は、以下の内容である。

- ①属性（大学への入学年・卒業年、現在の年齢、資格、学位、現在の大学で常勤の介護教員として従事した年数、現在の担当科目等）
- ②四年制の介護福祉士養成課程で学ぼうと思ったきっかけ、動機
- ③指定介護福祉士養成科目も含めて、大学教育を受けたことで影響があったこと
- ④卒後の進路、大学院進学と研究活動について
- ⑤介護福祉士養成大学の教員になろうとしたきっかけ、動機
- ⑥介護教員講習会について（受講機関、修了までの期間、講習会のあり方等）
- ⑦これからの介護福祉士養成教育に必要なこと（次世代につながるために）

5. インタビュー調査の方法

1) インタビュー調査実施までの流れ

- ・応募法で応募のあった方に対しては、各々の登録フォームの記述にしたがい希望する方法（メール連絡、電話をかける等）でそれぞれに連絡した。その上で、インタビュー調査への協力の有無を再度確認し、了解を得てインタビュー調査に関する必要書類一式（依頼状、説明書、同意書、同意撤回書等）をメールにて送信させて頂いた。
- ・機縁法によりご紹介頂いた方には、勤務先への電話あるいはメール等の記載がある場合には対象の方に連絡し、趣旨説明を行った。調査協力の承諾を得てからインタビュー調査に関する必要書類一式（依頼状、説明書、同意書、同意撤回書等）をメールにて送信させて頂いた。

- ・上記の対応と並行して、調査協力者との間の利益相反を回避するため、同じ職場の同僚等へのインタビュー調査は行わないように、調査対象者とインタビュー実施者とのマッチングを調査研究委員の方で行った。そのうえで、正会員校教員（グループチーフ）と協力委員との組み合わせで2名体制のインタビュー実施者グループを編成した。

2) 調査の実施にあたって

- ・zoomによるオンラインインタビューの実施にあたり、正会員校の教員がホスト、協力委員を共同ホストに設定し接続の不備等に対応した。
- ・調査対象者に挨拶、自己紹介をし、説明書を共有画面で示し、目的、質問内容、倫理的な配慮に関する事項について口頭にて伝えた。その際に、録画をすること、文字起こし機能を用いることの説明をし、了解を得てレコーディングを開始した。

- ・同意書についても共有画面で示し説明の上、事前に送付した同意書にサインをしてもらい、その用紙をPDF化して頂き、メールかチャットで送信して頂いた。

6. 分析にあたっての手続きとその方法

- 1) インタビュー調査の実施時の手続きとローデータの作成
- 2) 質問項目ごとのレイアウトデータの作成
- 3) データの加工・分析（調査研究グループに開示し内容の精査）

【倫理的配慮】

本研究は、介護福祉士養成大学連絡協議会の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：四大協－2）。調査協力は任意であり、協力に同意しないことにより不利益を受けないこと、調査対象者の紹介は匿名で行い、自らが応募された場合でも、説明を聞きご辞退があっても不利益を被らないことを、文書と口頭で説明し同意を得て実施した。

【結果】

・調査協力者は10名。大学入学の時期は、1999年度以前 2 名、2000年度から2008年度 8 名。現在の職位は、准教授 5 名、講師 2 名、助教 3 名。学位は博士 4 名、修士 6 名（内 2 名は博士課程在学中）。年齢は30歳代後半～50歳代前半で、大学入学が2000年度以降の 8 名の平均年齢は39.75歳。（表1参照）

表1 調査対象者の属性

現在の職位	年代	学位	常勤介護教員年数	資格・免許等	担当科目
准教授 5名	39歳～ 49歳	博士4名・ 修士1名	6年～19年	介・社1名 介・社・専門員 3名、介・社・ 高校福祉1名	介護関連科目以外（卒業 研究、SW関連、教養教育 等担当）5名
講師 2名	39歳～ 53歳	修士2名	3年～13年	介・社2名	介護関連科目中心2名
助教 3名	35歳～ 39歳	修士3名 (内、博士 在学中2 名)	2年～12年	介・社2名 介1名	介護関連科目中心2名、 SW実習関連含む1名

※資格等：介（介護福祉士）、社（社会福祉士）、専門員（介護支援専門員）、
高校福祉（高等学校教諭一種免許（福祉））

◆介護福祉士養成課程で学ぼうとしたきっかけ

- ①2000年前後は介護保険が始まる・始まった時期で福祉のビジョンが明るかった 2名
- ②中学の時から介護福祉士の資格を取りたかった 3名
- ③高校時のボランティア活動で、介護福祉士になるというのが漠然とあった 1名
- ④福祉の仕事に就きたい。入学後社会福祉士・介護福祉士の同時取得を決めた 4名

◆四年制の介護福祉士養成課程（大学）で学ぼうとした動機

- ①介護保険が始まった頃で、プラスして介護も学べるころと考え選んだ。
- ②家から通いやすい場所に、社会福祉士の資格も取得できる四年制の大学があった。
- ③親の希望で大学へ進んだ。行くのであれば県外の大学で介護福祉士だけでなく、社会福祉士も一緒に取れる大学を選んだ。
- ④介護福祉士一本でよいか、迷った。そのため福祉系の大学を選択した。
- ⑤福祉に関する仕事に就きたいという思いから。介護・社福のダブルライセンスがとれる福祉の大学を選択。
- ⑥人の役に立ちたいという思いが動機。専門学校は考えていなかった。福祉を学ぶ大学を探していた。
- ⑦介護福祉士になりたいというよりは大学進学を考えていた。
- ⑧誰かの役に立ちたいという思いがあり大学進学を決めた。

◆ 卒後の実務経験・進路

介護職中心 5 名、相談職の期間がある 5 名。大学院進学は、介護職場で働きながらの修士課程 4 名、博士課程 1 名、大学等での非常勤講師をしながらの修士課程 2 名、退職して修士課程が 3 名であった。

◆ 介護教員（大学）になろうとしたきっかけ

2 つの動機づけが考えられた。1 つは、「母校等の教員からの誘い」が 5 名、もう一つは、介護教員という道があることを、大学卒業後の体験やキャリアを積む中で気づかされてきたというものである。いずれにしても、母校の教員、研究者グループのメンバーとの関係を日頃からもってきたという経緯が背景にあると考えられる(表4参照)。

表4 介護教員（大学）になろうとしたきっかけ・動機等について

母校等の教員からの誘い	福祉教育を学んだゼミの先生から、こういう口があるけどのお声掛けがあったから。	
	自分から教員を目指していたわけではないが、介護教員の退職に伴い、大学の時の恩師からの声掛けがあった。新たに採用する教員は、卒業生から選ぶことを希望されていた。	
	大学で教えてくださっている先生が退職する時期が近いということえを聞きまして。あと3年ぐらいとみたいな感じでいわれて襲撃が走りまして。最終的に決めたのは自分ではありますが、どちらかというと周りの先生方にこう支えて頂いて教員になっている感じ。	
	大学院を卒業した後に母校の教員と連絡を取り合っていたので、助教の枠を介護福祉専攻でつくろうと思っているというお話を頂いた。	
	私自身はもっと年をとって経験を積んでから教員になれるといくらいだったんだけど、修士を終えた直後に大学の方で介護福祉士の教員を探しているという連絡がありそれに手をあげたという形が大きなきっかけ。	
介護教員という道がある	介護現場での体験	数年特養で働いていて社会福祉法人の介護職には先のキャリアがない。30歳手前でこの先どうしようか考えていたところ、大学時代の恩師から実習教育室の教員採用の話もらった。それで教育という方向もあるとイメージできるようになった。その後、現場の実務経験がある教員募集があり採用試験を受けた。
		一緒に活動している先生から求人が出ると聞いて応募した。祖母が入院して拘束されている状態を見て、この業界を変えようと決意した。要介護者の身の回りのことは変えられても全体を変えることはできない。仲間を増やすために介護人材を増やそうと思った。
		4年制大学を卒業したからには、さらに経歴を活用したいと思い、実習指導者研修を受講。そこで、自分の学びを言語化できる楽しみを実感。現場の職員の意識の差、やる気の差に違和感を感じており、また職員への指導への限界も感じた。このまま介護福祉士として仕事を続けるのはもったいない気持ちになり、大学院進学が一つの道だなというふう考え、指導者、教育者の道を模索しはじめた。教員になるためには講習会であったり大学院をでなきゃいけない。
	大学助手の経験	非常勤で演習助手をしていたときに、学生が真面目に意欲的に取り組んでいる姿を見て教えることが楽しいと感じた。自分の本職になるとまでは考えていなかったが、徐々に教員を目指してもいいかなと思うようになった。
		進路は介護教員を目指していたのではなく、漠然と教員になりたかった。大学教員にどのようなのかかわらなかつたが、助手だったので徐々にわかってきた。修士・博士に進学した。

◆ 介護教員講習会について

受講費用負担は、①全額公費 3 名 ②全額自己負担 4 名 ③公費・個人研究費 1 名 ④個人研究費 1 名 ⑤受講料は公費、宿泊代、放送大学は自己負担 1 名、3 名がコロナ禍によるオンライン受講である。

◆ 四年制の介護福祉士養成教育で必要なこと

「リーダーシップ力」「教養科目での学び」「課題発見能力」「社会福祉士とのダブル資格取得」「教員や指導者になれる知識や学び」「研究への意識」「二年制課程との差別化」が挙げられた。

- 「リーダーシップ力」については、ほとんどの方が回答し現場の人を引っ張っていけるような専門性を持たなければいけない、現場からも将来リーダーとして活躍することを期待され、それに応える責務がある。
- 「教養科目での学び」については、各大学によって特徴は違うが教養科目を取ることで教養を深めたり広げることができた、人間性を深められたという回答があげられた。

- 「課題発見能力」については、実習を振り返り、実習で気づいた苦手なことを克服するために4年間をどのように使うのかを考えることやフィールドを学外へ向け、地域におけるニーズの発見力や自ら起業していくような開拓力を養うこともあげられた。
- 「社会福祉士とのダブルライセンス取得」については、四年制大学を選択するメリットとしてあげられていた。
- 「教員や指導者になれる知識や学び」については、現場での職員教育を含め、他者に指導ができる知識を身につけることがあげられ、卒業後のフォローアップも必要であるとの回答があった。「研究への意識」については、四年制大学として学外とつながりをもち、研究活動を意識して実践することがあげられた。
- 「二年制課程との差別化」については、同じ資格を4年かけて取得することの理由や目的を明確にする必要性があげられた。どのような学生を社会へ輩出させたいのか、そのために何をするのか一貫したビジョンを持つことや、国家試験合格率だけではない目指すべき像を明確にすることなどがあげられた。

◆これからの介護福祉士教育のキャリア形成において必要なこと

➤四年制大学を卒業した介護福祉士は、大学教員、施設長、初任者研修の講

師、管理者等、知識・技術を生かしキャリア形成ができる。

➤学生は卒後5年、10年後をイメージすることが難しいため、卒後の介護福

祉士としての様々なロールモデルを見せることが必要である。

➤就職後、その組織の明確なキャリアアップの視点、キャリア形成の視覚化、

明確化が必要であり、視野を広く持ち続けることが必要である。

➤マネジメント力、リーダーになるための学習、リーダー像、さまざまな視点から自分の介護現場を俯瞰してみる。

➤介護の仕事だけではなく他の仕事もできる。色んな広がりキャリアラ

【考察・まとめ】

結果から見えてきた、介護福祉士養成大学卒の介護福祉士養成大学教員へのキャリア形成支援の現状と課題を、以下 3 点に整理した。

1. 介護福祉士養成大学卒の介護福祉士がキャリアを積み上げる土台について

- 四年制の介護福祉士養成大学の強みは、**時間**（学び・出会いの時間）、**学歴・資格、教育・研究**（人間理解・研究志向）であり、学位取得、2つの福祉士受験資格、教育・研究の深まり等が、キャリアを積み上げる土台にある。
- 一方で、卒後の実務経験では、看護師の場合は研修受講によるスキルアップが診療報酬にも結び付いていることが介護福祉士とは異なる。介護福祉士養成大学卒の介護福祉士がキャリアを積み上げる土台には、実践現場と連携し、専門性の高い実践を指導できるスキルの修得等、**介護福祉士としての経験と知識を積み上げる方策**が求められるのではないか。

表 7 介護福祉士養成大学で学ぶことの強み

カテゴリー	サブカテゴリー	語　　り	
時間	学 び の 時 間	きちんと実習を振り返る時間があった	
		自分の学びたいことを学習した	
		介護と社福の勉強を余裕をもって取り組めた	
		学外からも教養を学べた	
		大学で幅広く学び、自分の適性について見つめる	
	出 会 い の 時 間	様々な分野で活躍したい人との交流	
		友人の幅、活動範囲が広がった	
		寮生活、いろんな学科の学生と話ができた	
		学園祭なども一から作り上げていく	
		大学という環境上、様々な人に出会える	
		学園祭、アルバイト、遊び	
		長期休暇で海外国内旅行	
		高校生活で培ってきた地元の人たちだけではない出会い	
学歴・資格		学士を取れて今のキャリアにつながる	
		ダブルの国家資格	
		資格取得（住環境コーディネーターや社会福祉士）	
教育・研究	人 間 理 解	介護以外の領域含め学ぶ	
		思考の特徴、他職種連携の基礎	
		介護の切り口で人を理解する	
		専門職としてどうあるべきかだけでなく、人としてどうあるべきかを教えて頂いた気がする	
	研 究 志 向	文献を読んで調べる、卒論を書いたりして総合力がついた	
		研究活動に参加、指導していただいた先生から、発表や論文の執筆を促してもらった	
		四年制大学を卒業した介護福祉士は研究をしなければならない。介護現場に勤めてからも研究のことが使命のように感じられた	

2. 介護福祉士養成大学教員へと進むためのキャリア形成支援プロセスについて

- 教員になる過程では、母校の教員、研究者とのつながり等の先人の導きが大きいが、多くが個人の努力に委ねられてきた。歳月と経済的負担、実務経験と研究能力・教育力を兼ね備えた人材として、看護教員や理学療法士・作業療法士専任教員のように、大学や大学院進学での単位認定、教員になった上での講習会の充実などの道筋を立てていくことが課題ではないか。

3. これからの介護福祉士養成大学教育とキャリア形成において必要なこと

- 介護福祉士教育において介護教員は、倫理教育の普遍性・重要性、生活における介護の価値とそれを担う介護福祉士の高い専門性と人間力も含めた人材育成への使命感を持っている。福祉教育の種まきは高校生では遅く、「小さい頃からの親和性を持たせる機会を作ることも重要」という語りがあり、より低年齢層から実施していく必要があるだろう。

- 介護福祉士養成大学教育には、リーダーシップやチームマネジメント能力の養成が求められ、その先に実習指導者や経営者、教員といったキャリアへとつながる。そのためには、施設長をはじめとする人事担当者も介護福祉士のキャリアについての理解及び意識が必要になるだろう。実習指導者や教員といったキャリア形成を視野に入れるためには、介護福祉士としての5年勤務を意図的に配置することなどがあげられる。
- キャリア形成において必要なこととして、「施設経営、講師、管理者、教える立場など」が四年制大学卒業者には求められていると考える。「知識・技術を生かしたキャリア形成」、「卒業後の介護福祉士としての様々なロールモデルを見せる」、「色んな広がりキャリアラダーを確立。介護教員、福祉住宅の建築など、生かせる場がたくさんあることを示す」などの回答があった。大学で学んでいる時から、5年後、10年後、15年後の様子を示していくことが重要である。また、マネジメント力などリーダーとしての力を身につけられるような促しも必要と考える。

【おわりに】

本報告は、本会の第8期調査研究委員会事業による研究成果である。調査協力者の多くが本会の会員校の教員であり、調査実施者も本会の会員であることから、個人が特定されやすいことを考慮し、表現の工夫や表の並びの順番を入れ替える等の対応をさせて頂いた。また、会員による会員等への調査であるため、時として恣意的と捉えられる面があるかもしれない。しかし、高い倫理性の保持を土台とした介護ニーズの多様化・複雑化・高度化に対応できる介護福祉士を養成する必要性が指摘されている今日において、今を見据えこれからの介護福祉士教育のありようについて、調査協力者も調査実施者も真摯に向き合ってきた。

今後の四年制大学での介護福祉士養成教育において、在学中から卒後教育までを見通したキャリア形成支援の体系化に向けた基礎資料としてさらに吟味し、介護福祉士教育の発展において寄与していきたい。

最後に、本調査研究を実施するにあたり、調査協力者の皆様をはじめ、介護福祉士養成大学連絡協議会の会員校の皆様、個人会員の皆様、介護福祉士養成大学の皆様には、多大なご協力を賜りました。この場をお借りして感謝申し上げます。

ご清聴ありがとうございました。



【引用・参考文献】

- [Microsoft PowerPoint - \(概要\) 理学療法士・作業療法士学校養成施設カリキュラム等改善検討会報告書 \(mhlw.go.jp\)](https://mhlw.go.jp) (2024.05.04 閲覧)
- [Microsoft PowerPoint - 介護福祉士養成課程における教育内容等の見直し \(mhlw.go.jp\)](https://mhlw.go.jp) 参照
- 森田敏子、魚崎須美、早川佳奈美、細川つや子、上田伊佐子(2018)「看護基礎教育と看護継続教育の歴史的変遷からみた専門職としての看護キャリア形成」徳島文理大学研究紀要 第95号95－114
- 日本介護福祉士養成校協会HPによる [\[kaiyokyo.net\]](https://kaiyokyo.net)(2023.07. 12参照)
- 鈴木真智子、大山早紀子、大島千帆他 (2015) 「四年制大学介護福祉士養成課程卒業者のキャリア形成の現状と課題：社大卒業者のキャリア形成と大学の役割に関する全数調査結果から」『日本社会事業大学研究紀要』 61巻97-109
- 田中将司、古賀なな子、新村信貴、森陽平他 (2021) 「臨床心理学におけるオンラインインタビューの方法と倫理的配慮」『九州大学総合臨床心理研究』 12,pp.91-96
- 横山孝子・阪田千賀子・山口リサ (2009) 「介護福祉教育とリカレント教育－介護福祉士養成課程卒業生の動向調査から」『社会関係研究』 第